

省エネルギー農業とブドウ栽培

京都大学農学部

杉 浦 明

最近、地球環境の保全と限りある資源を大切にしようとの立場からエネルギー低投入による持続的農業 (Low Input Sustainable Agriculture) の必要性が説かれ、有機農法に関する数々の提言や試みがなされており、1990年代はその検証に当てられるであろうと予想されている。ブドウ栽培の分野でもそういった兆しがみられ、今年のASEV誌にも「有機栽培によるブドウ生産への転換に関する考察」、「持続的農業とブドウ生産」といった予報的記事が掲載されている。園芸作物であるブドウの栽培でそのようなことが果して可能かどうか、わが国の実情に照らして考えてみたい。

そもそも園芸というのは、囲われた場所(庭園)で花・野菜・果物など劣化しやすく日持ちのしない作物を集約的に栽培することであるから、程度の差こそあれ元来エネルギー消費型の農業である。特に日本でのブドウ栽培となると、'甲州'のように古い時代に日本の風土に根づいた品種を除けば殆どが明治以降に導入されたものであり、多雨多湿の気候に適應していないものが多く、頻繁な農業の散布なしには栽培が成り立たないのが現状であろう。そのうえ、生食用ではすぐれた食味の他に芸術品のような外観美が求められるとなると、さらに手をつくして造りあげなければならない。果物を目で楽しむ(評価する)という食習慣がいつまでも生き続ける限り、省力・省エネルギー栽培は遥かかなたの存在であるといってよい。また、季節の味を尊ぶといいながら、他方では初物(走りの物)を珍重するという日本人の食に対する性癖が飽食という名のもとに膨れ上がり、化石燃料を大量消費する果物の加温施設栽培をいやが上にも押し進める結果を生んでいる。今、持続的農業の必要性が説かれているのは、このままエネルギー多投の農業を続ける限り我々の存在そのものが危うくなる恐れがあるからで、もはや経済合理性や飽食・美食に立った食習慣のみで果実生産を考えていたのでは、破局への道を転がってゆくのみだと言わざるを得ない。経営規模の小さい日本でその生産物の高価格が保証されなければ農家の経営は成り立たないことも事実であるが、エネルギー多投によってのみ経営がいつまでも続くかという点も根本的に考えなおしてみる必要があろう。

明治初年に欧米から初めて珍しい果物類が導入されて、それが何とか日本の風土で発展してきた背景には技術開発が大きく貢献したことは間違いないが、基本的には適地適作が行われてきたことにあるといってよいであろう。地球環境をとりまく現在の危機は、化石エネルギーの支えのもとに発展してきた科学技術がこの大自然を相手にした農業をも大きく呑み込み、自家葉籠中の物にしようとした奢りのなかで現れた破綻と言えなくはない。冒頭にあげたASEVの記事も、要はこの奢りのなかでとかく忘れがちにされてきた自然の力に目を向けて適地適作の原点に立ち返ることを示唆したものに他ならない。いまや、世界の情報は容易に得られ、各地の遺伝資源を収集することも可能である。ブドウの多様な遺伝資源を収集・利用してわが国の風土に適し、省エネルギー栽培に向けた品種を根気よく育成してゆくことが、これから何よりも望まれるのではなからうか。